

「中国の文化と慣習」シラバスの作成と実践

—自文化を再認識するための授業の試み—

李旭

1. はじめに

本稿は「中国の文化と慣習」という授業のシラバスの作成及び正式に開講する前に行った試行授業に関する報告である。筆者が平成28年度上級研修⁽¹⁾で取り組んだプロジェクトのテーマは「『中日文化比較演習』シラバスの開発—自国の文化を再認識するための授業の試み」である。「中日文化比較演習」という授業を設置する目的は中日文化を比較することで日本語専攻の学生が日本文化にのみ興味を示す傾向を是正し、自分の国の文化への関心を喚起するためである。そのための準備として2014年に「日本語教育における中国文化取り入れの策略について—学生の自文化意識を高めるために」をテーマとした本大学内の研究プロジェクトを立ち上げ、日本語学習の授業に中国の文化を取り入れる方法を検討していた。普通の日本語の授業に必要な応じて中国文化を取り入れることも考えられるが、実際に試みたら無理が多かった。そこで日本文化と比較しながらの学習が学生に面白みを感じられるのではないかと「中日文化比較演習」を開講することに決まった。上級研修を受け、研修を終えた段階で授業のシラバスを完成させた。できるだけ早く研修の成果を活かすべく、授業が2019年秋学期に正式に開講する前に、計14回試行授業を行った。最初は試行は10回ぐらいにしようと考え、2017年春学期6回、2017秋学期4回と試行を終えると、「中国的魂、国際的視野」⁽²⁾の人材を育成しようという教育方針が掲げられ、日本語学科全体のカリキュラムが改定されることとなり、授業名も「中日文化比較演習」から「中国の文化と慣習」と改定されたのである。それにより、授業の内容から方法まで研修成果のシラバスと比べ、一部変更され、中日文化の比較より、中国文化の学習を中心に行われることになった。そこで2018年秋学期に新授業のために中国文化の学習を中心とする試行を4回行ってみた。中国文化の授業にもかかわらず、対象が日本語学科の学生であるため、必要に応じて日本文化と比較しながら進めるように心がけていた。試行授業は計画外の授業で単位がないため、学生を募集することに決めた。ゼミの形で行う計画なので、10人規模の少人数クラスを作りあげた。本稿では、14回にわたる試行について、シラバスの内容、実施の流れ、試行成果と今後の課題などを報告する。

2. 「中国の文化と慣習」設置に至る経緯

我が大学の日本語学科の学生は日本文化に高い興味を示しているのに対して、自国の文化には詳しくない、さらには無関心だという傾向が見られる。それは自国の文化に関する知識の乏しさと、それを日本語で伝えようにも伝えられないという無力さに表れている。これは日本語を含め外国語専攻の学生に共通の現状といわれている。このような現状に至らしめる要因は様々であるが、日本語学科の学生の場合は主に次の四つが考えられる。

- 一、自文化知識が欠如している。中国の文化について日本語で話すどころか、中国語でもうまく話せないことが多い。それは中国文化知識が不足しているためだと考えられる。
- 二、自文化意識が欠如している。学生が日本語専攻であるため、自国の文化も学ぶべきだと意識していないことが多い、そして関連授業を設置する大学も少ない。
- 三、異文化間コミュニケーションの真義を誤解している。日本語専攻だから、日本の文化を理解すればよいという誤解が多く、自文化を発信しようという積極性が見られない。
- 四、日本語による自文化発信力が不足している。中国文化について知識を備えていても、日本語でうまく伝えられない。即ち日本語による口頭表現力が不足している。

もしも学生がこのような状態で異文化間コミュニケーションに加わるなら自文化不在のコミュニケーションになり、自文化不在のコミュニケーションは一方通行で、相互理解が実現できないと懸念される。このような現状を改善するために、日本語で中国文化を学ぼうという発想が生まれ、「中日文化比較演習」授業を設置することに至った。上級研修ではこの授業のためのシラバスを作成することが課題であった。研修終了後、大学のカリキュラムが変更したところがあり、一年生が対象の「中日文化比較」、二年生が対象の「日本文化解説」、三年生が対象の「中国の文化と慣習」が設置されることとなった。「中日文化比較」は授業名からすれば相似しているが、対象が一年生であるため日本語でのディスカッションなどは無理なので、基本的には中国語で学ぶ方針である。そのため、上級研修で作成したシラバスを「中国の文化と慣習」に合わせて作り直したわけである。授業名が変わったにもかかわらず授業の目的は一致している。それは学生の自文化意識及び自文化発信力を養成することであり、即ち前述の現状に至らしめる四つの要因中の「二」と「四」を改善することである。「一」と「三」については自文化意識がつき次第自ら自国の文化知識を学習していき、そして実際の異文化間コミュニケーションを経験しているうちに肌で異文化間コミュニケーションの真義を感じられるものである。そのため授業の目的は「二」と「四」に限定することになる。「二」の「自文化意識」というものは、学習する過程で知らず知らずのうちに高まるものであるため、そのために特にすることはないわけである。そうすると、「四」の「日本語による自文化発信力」の養成は本授業の主要な目的となる。さらに、日本語による自文化発信力の養成は、最終的に自文化を再認識することにつながるのが望まれる。

3. 「中国の文化と慣習」のシラバスの作成

以上の考えに基づき、上級研修の成果としてのシラバスを作成した。そして変更された新授業に合わせて作り直した。わずか32コマで時間数が限られた授業のシラバスにはどんな内容を組み入れればいいのかは決めがたいものであるが、「大文字C文化」（社会的・政治的・経済的な施設に関する知識や、歴史的な重要人物、文学や芸術などフォーマルなもの）と「小文字c文化」（衣食住や移動方法、行動様式等の日常生活に関わるもの）（国際交流基金 2002：38）と、どちらにも目を向けることを原則とし、そして日本との比較に取り上げられそうな項目がよいとして、トピックを決定した。表1は変更前と変更後のシラバスの構成を示したものである。

表1 「中国の文化と慣習」シラバスの構成

対象者	日本語学科三年前期		人 数		10人まで限定	日本語能力	N2相当
目 的	日本語で自文化学習、再認識する。		授業目標		自文化を伝え、説明する口頭表現力を養成する。		
時間数	32コマ						
順番	内容・トピック名 (変更前)	内容・トピック名 (変更後)	C/c	予 定 時間数	授業 形態	目 標 (変更後)	
1	文化理解方法論	文化理解方法論		2	講義	文化理解の方法を習得する。	
2	文化比較方法論	文化比較方法論		2	講義	比較文化の方法を習得する。	
3	中国文化概論	中国文化概論		2	講義	中国文化の枠組みを知る。	
4	国旗・国歌・国花	諸子の教え	C	4	講義 議論	孔子、老子といった諸子百家の教えを理解する。	
5	お正月・春節	お正月と帰郷	c	2	発表 議論	お正月の過ごし方、背後にある考えや価値観などを理解、伝え、説明する。	
6	お墓参り	清明節と祖先崇拜	c/C	2	発表 議論	お墓参りの作法、背後にある考え、価値観や伝統思想などを理解、伝え、説明する。	
7	端午の節句	端午と屈原	c/C	2	発表 議論	端午節の過ごし方、背後にある考え、価値観などを理解、伝え、説明する。	
8	重陽節・敬老の日	重陽と敬老	c	2	発表 議論	重陽節の由来、敬老や養老の心得を理解、伝え、説明する。	
9	十五夜・中秋節	中秋と月見	c	2	発表 議論	中秋節の過ごし方と月のイメージを理解、伝え、説明する。	
10	干支	呼称と宗法観念	c/C	2	発表 議論	様々な呼称の背後にある家父長制を理解、伝え、説明する。	
11	故郷と郷愁	諺と故事	C	2	発表 議論	諺と故事に伝えられる歴史、地理環境、価値観を理解、伝え、説明する。	
12	婚活と就活	結婚式とお葬式	c	2	発表 議論	結婚式とお葬式の作法とその背後にある価値観を理解、伝え、説明する。	
13	親孝行とは	礼儀作法と人間関係	c	2	発表 議論	人付き合いにおける礼儀作法を理解、伝え、説明する。	
14	数のしきたり	迷信とタブー	c	2	発表 議論	方位、色彩、数字などに関わる迷信やタブーを理解、伝え、説明する。	
15	漢字と漢語	漢字と六書	C	2	発表 議論	漢字の造字法と用字法及び漢字という記号に凝縮された思想、美意識などを理解、伝え、説明する。	

表1に示されているように、変更前にしても変更後にしても大文字C文化も小文字c文化も触れられ、そして伝統文化が学ばれるとともに、現代の行動様式や考え方も視野に入れられている。中日比較に取り上げられるものといえば、「お正月」「端午の節句」「月見」などの年中行事、「敬老」「礼儀作法」「結婚式とお葬式」などの行動様式、「呼称」「タブー」などの伝統的観念、「諺と故事」「漢字」などの言語文字があり、いずれも日本と比較するべきところのあるトピックである。さらに、自文化を再認識するという目的は変更前も変更後も変わらない。再認識とは、当たり前のように行っていることや、身近に行われていることに対して、日本語で勉強することでそんな考えがあったのかとあらためてその行動の意味と価値を認識すること、そして日本と比較することで、中国文化の独自性を改めて認識することである。

授業形態に関しては1から3までの内容を除き、教師主導の講義とは違い、学生参加型のゼミにする。事前課題としてまえもって配布されたトピック関連資料をディスカッションのスキーマにできるように予習しておく。授業の際まず一人の学生が配布資料を踏まえ、トピックに関して自分の理解を交えながら発表する。抜けた内容があれば、ほかの人が補足する。発表者はトピックごとに変更する。トピックによっては内容発表ぬきで、別の方法で、例えばキーワードを出し合うなどして内容の確認をすることもある。内容の確認がされた後、みんなでディスカッションする。ディスカッションにおいてトピック関連内容について客観的に情報交換するほかに、伝統に対する自分の認識、自分と異なる意見に対する自己主張などの発表も望まれる。文化学習と理解の方法としては、「3つのP」を発見しながら学び、理解することが考えられている。「3つのP」とは「21世紀の外国語学習スタンダード」によって提案されたもので、習慣や行動様式を意味する「practices」、その所産・産物を意味する「products」、そして価値観やものの見方を意味する「perspectives」(国際交流基金 2002:37)であり、それを最初の「文化理解の方法論」の講義で教えておく。なお、「3つのP」の中の「perspectives」に重きを置いて意見を交換したり、もっと広く問題意識を持って議論を重ねたり、文化の理解を深めていけるような学び方も試みる。

ところが、学生同士の議論が「perspectives」にたどり着かないこともあるであろう。そのような場合を想定して、議論を「perspectives」に導いていくための簡単な手引きを教師の参考としてシラバスに例示する。表2は「端午の節句」の手引きである。

表2 「perspectives」に導いていくための手引きの例示

「端午の節句」に関する「perspectives」に導いていくための手引きの例示			
風習	ステップ1 ヒントとなるキーワードを出そう	ステップ2 さらに充実させよう	ステップ3 学生にきちんとした文に整理して口頭で伝えさせよう
ボートレースをする	屈原、投身、舟、救う…	たくさんの舟を一齐に出す、先を競って舟を漕ぐ…	
船首に竜を飾る（竜舟）	竜、巨大、水中生息…	魚を脅かす存在…	
太鼓をたたく	太鼓、音、響き渡る…	よく響く音で魚を脅かす…	
粽を食べる	川、魚、餌…	魚の餌になってはいけない、粽を投げて餌のかわりにする…	
屈原を偲ぶ	憂国、建言、讒言、追放	高い品格や勇敢さに対する敬意、讒言者に対する軽蔑、詩による影響…	

これはあくまでも参考として例を示しただけであり、教師が自分の判断で進めていけばよいのである。

4. 実践例の報告

14回にわたる試行授業において、上記のシラバスに入っているトピックから、変更前の4、5、6、7、10と、変更後の8、9、15番を試行した。一回に一つのトピックが予想されていたが、予想より時間がかかり二回続いたものもある。実施方法として、次のようにAとBと二通りの流れが挙げられる。

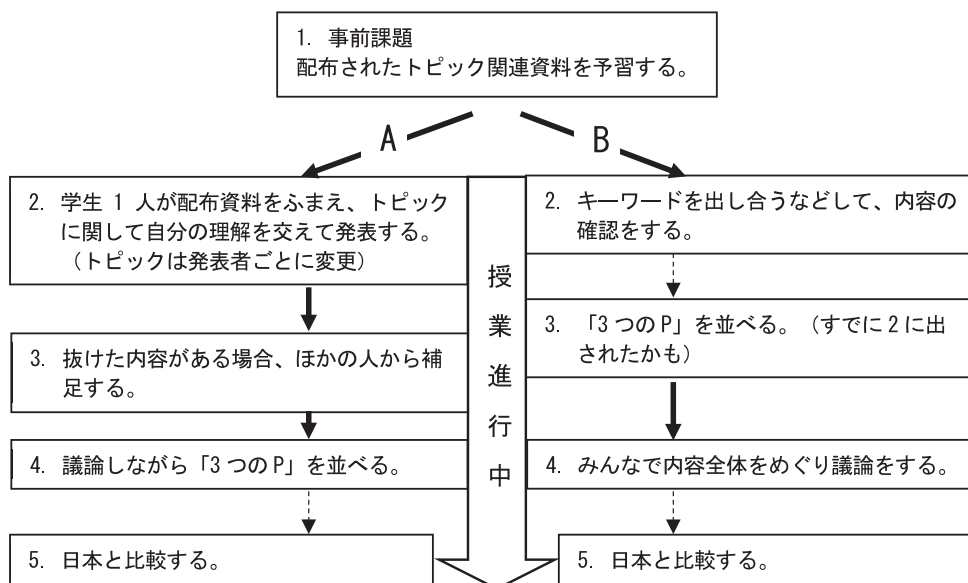


図1 実施方法としての授業の流れ

点線となっているところは行うか行わないかは未定だということである。「3つのP」の手順は配布資料を踏まえた発表やキーワードの出し合いが終わってから、みんなで順番に「practices」に入るもの、「products」に入るもの、「perspectives」に入るものを発見し、口頭で伝えた後に、与えられた「3つのP」の図式に従い、それぞれの枠に書き入れる。

次に、実践例を二つだけ取り上げ、その進め方を報告する。

4.1 「3つのP」の具体化による文化学習と理解

まず変更前の7番のトピックの「端午の節句」に関して報告する。「端午の節句」ははっきりとした「3つのP」があり、しかも試行は変更前なので、「流れA」にそって中国と日本を比較しながら進めていたのである。

端午の節句をめぐる「3つのP」はもしも教師から示すと、学生が受身的に詰め込まれることになるので、「学習者と共に発見したり考えたりしながら、楽しんで教えることができる方法」(築島史恵 2010)を試みた。

前述の授業の流れに関する説明のように、まず一人の学生が事前に課題として配布された資料をふまえ、トピックに関して自分の理解を加えたうえで発表する。そしてクラスメイトが補足する。その後「3つのP」発見作業を始める。発見した「3つのP」をそれぞれの枠に書き入れる。

すると、図2に示されているように、「practices」には粽を食べる、菖蒲湯に入る、菖蒲酒を飲む、太鼓を打つ、ボートレース(竜舟の競走)をするなど、それに関連して「products」には、粽、竜舟、太鼓、菖蒲湯、菖蒲酒などが入った。この2つのPは普通の事実の並べ立てなので、スキーマを活性化させればすぐに書き入れられるのである。そのかわり、なぜそうするのかとその由来、即ちその背後にある価値観やものの考え方としての「perspectives」となる

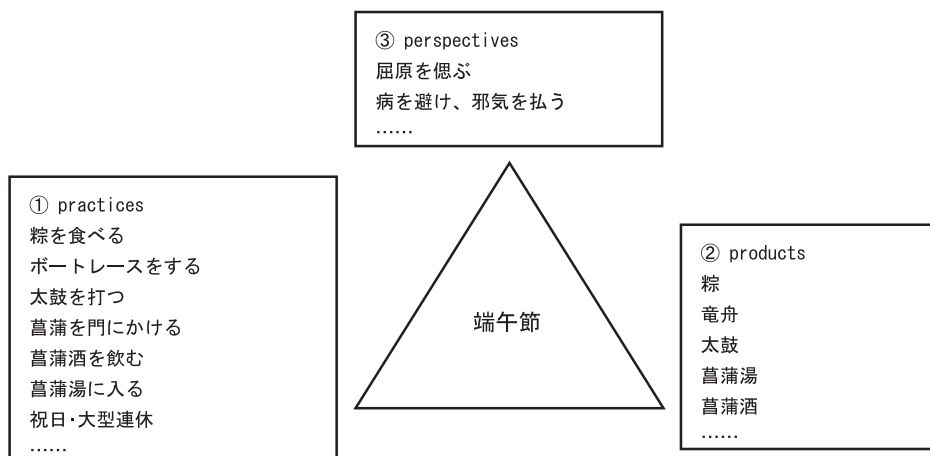


図2 中国の「端午節」に関する「3つのP」構図

とすこし手間がかかる。まず屈原の話が出てくることが多い。屈原は中国の歴史において愛国詩人として位置づけられているが、愛国と詩については授業では詳しく触れないことにしていた。それより「practices」に挙げられる「粽を食べる」、「太鼓を打つ」と「ボートレースをする」など、屈原に因んでいることを再認識させたいのである。ただ、中国は広くて、同じ端午節でも、地方によって過ごし方が異なり、都会では菖蒲酒を飲むことも、菖蒲湯に入ることもほとんどなくなったが、田舎ではまだこの風習が残っているなど、自分の故郷における過ごし方を学生が積極的に補足してくれるところもあった。

本報告を読んでいる方により理解してもらうために屈原の話を書き添えておく。屈原は戦国時代楚の国の政治家で、憂国の詩人である。危うくなった国のために、齊と同盟して秦に対抗しよう主張したが、讒言されて、楚王に追放された。後に、秦に侵攻された故国の行く末に失望して、川に身を投げた。人々は屈原を救うために一斉に舟を漕ぎ出したが、遺体すら見つからなかった。これが5月5日のことだったといわれている。人々は屈原を記念して、毎年端午節にあたる5月5日になると、舟の競走をするようになり、また川底に眠る屈原の遺体を食べさせないように、船首に竜頭を飾ったり、太鼓を打ったりして魚を脅かし、粽を魚の餌に川に投げ入れるようになった。

中国の端午節に関する話を終えると、今度は日本の「端午の節句」と比較することになる。日本の端午の節句については、すでにほかの授業で学んだため、資料を配布しないが、復習してくるようにと要求してあった。学生が二つのグループになり、机を挟んで座り、中国人学生と日本人学生が交流しているような場面設定をする。試行の日は端午節を控えていたので、粽をのせたお皿まで出していた。学生たちが中国の端午節を参照に日本の端午の節句の「3つのP」発見を始めた。発見したものを次のように①②③と順番に並べた。

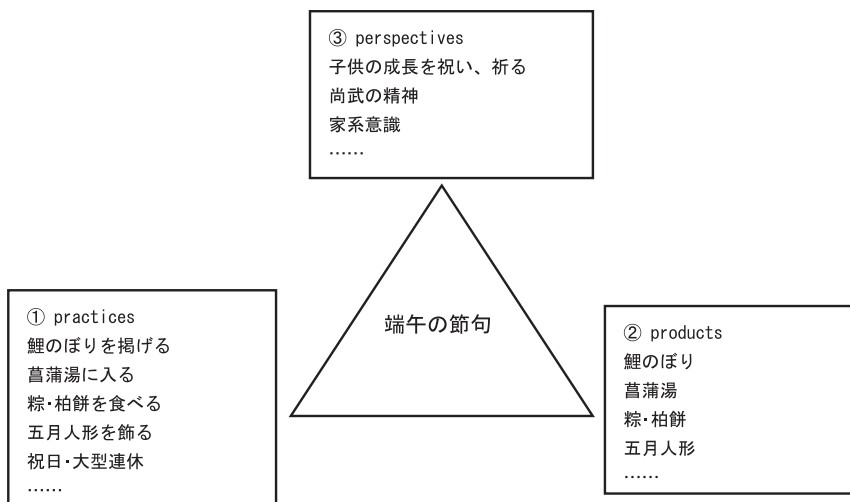


図3 日本の「端午の節句」に関する「3つのP」構図

中日両方の端午に関する情報がそろると、比較する時間に移るわけである。両国とも菖蒲湯に入ることと菖蒲酒を飲むことがあり、その由来の違い、日本語の菖蒲と尚武の語呂合わせ、鯉のぼりの由来に関わる「登竜門」の話などが熱心にされていた。それ以外に、興味が示されたのは、日本では端午の節句が「子どもの日」であること。「子どもの日なのになぜ女の子より男の子に特別な祝福を送るか」「子どもの日はなぜ休日になるのか」「中国の児童節は6月1日で、国際児童節と呼ばれるのに、なぜ日本では祝わないのか」等々の疑問が出され議論が行われた。学生からのコメントであるが、一年生の「日本事情」の授業で学んだが、そこまで考えなかった、今ではどうにか日本語で議論しながら新しい発見ができることに達成感を感じたという。それは文化の学習と理解をする過程で情報交換ができる、勉強になることは期待されるのはもちろん、議論したりすることで新発見ができることは勉強を続けていくための原動力となることが言えよう。

「3つのP」を具体化させることにより、端午節に関する情報や知識が強化され、それを伝え、説明、議論をすることにより口頭で自文化を表現する能力が磨かれ、日本と比較することにより自文化が再認識され、そして日本文化への理解も深まる効果があったと思える。

4.2 問題意識を持つ上での文化理解の深まり

次に述べるのは変更後の8番の「重陽と敬老」のトピックに関する実践例である。このトピックで重陽節に関する過ごし方と由来より敬老に焦点を当てる。現在の中国では、重陽節といっても名前だけのもので、伝統的な過ごし方はあまりされなくなり、そのかわりに「敬老」は若者が考えるべき問題だとされてきたのである。このような主に考えや価値観に関わる比較的抽象的なトピックの場合は、「3つのP」の発見よりも、議論を中心に進めていくほうがよい。重陽節の場合は、重陽節に関する情報を一通り交換してから、直ちに「敬老」「養老」などの問題意識をもって考えてもらう。話は中国社会における高齢化傾向や高齢者の生き方など現実的なことから、理想の老後生活や自分がどのように年を取っていききたいかなど観念的または感覚的なことまで広がっていき、結局二回続けて行われた。詳しい展開は次のとおりで、基本的に「流れB」にそって実施した。

まず9月9日という日に関してひとまず何を思い浮かべるかと学生に質問した。その答えとして、何より先に口をそろえたように、重陽節にちなんで王維の詩「九月九日憶山東兄弟」が挙がった。これは予想外かといえそうでもない。中学の教科書にある詩なので、暗誦できない人はいないぐらいである。その中国語原文を黒板に書いてもらい、日本語の書き下しは次回調べてくるようにと言ったところ、すぐにインターネットで検索できて、横に書いてくれた。

独在異郷為異客　　独り異郷に在りて異客と為る
 每逢佳節倍思親　　佳節に逢う毎に倍す親を思う

遥知兄弟登高処　　遙かに知る兄弟高きに登る処
遍插茱萸少一人　　遍く茱萸を挿すも一人を少かん

教師がその勢いに乗り、9月9日の重陽節には何をするかと、この詩から「practices」に入るものを出してもらった。「高きに登る」と「茱萸を挿す」と二つ挙げられた。それに続き、さらにスキーマが活性化され、配布資料に出ている「菊花を愛でる」「菊酒を飲む」「敬老」などのキーワードも出た。そのついでに敬老の話題へと導いていく。中国では「九」は「久」と同音なので永遠の命、即ち長寿を意味するので、お年寄りの人たちが長生きするよという願いを込めて9月9日を「老人節」と決められている。その日の前後に社会的に「敬老」をテーマとするイベントが行われることもある。ゆえに、話題を「敬老」に絞ってディスカッションが進められていく。ディスカッションは「なぜそうするのか」「どうしてそんなことがあるのか」と常に「perspectives」を意識しながら進めていくよと注意しているが、学生がどこから話を始めればいいのか分からなくて戸惑っていたので、教師は、万が一に備え事前に準備してきた課題を与え、問題意識を持って思考作業をさせた。

- 敬老はどのように行えばいいか。具体的に例を挙げよう。
- 中国における老人の社会的地位はどうか。
- お知り合いのお年寄りの方はどんな老後生活をしているか。それをどう思うか。
- 中高年のおばさんたちを中心にされている「広場ダンス」についてどう思うか。
- 席を譲ってほしくない老人と譲ってくれないと怒り出す老人がいるが、それに対してどう思うか。
- 高齢化社会のために若者にできることは何なのか。
- 理想の老後生活はどんな様子か。
- お年寄りに対する呼称について中日比較しよう。
- お年寄りの生き方に関して中日比較しよう。
- 日本の「敬老の日」と中国の「老人節」を比較しよう。

これらの課題をヒントに意見交換がされていた。自由発言のため、ディベートのように賛成意見と反対意見が飛び交い、議論が激しくて、なかなかまとまらないため、予定より時間がかかった。特に時間がかかったのは日本と比較するところである。みんなの発言の中で面白く印象深い発言がいくつかあった。

一、お年寄りに対する呼称のことである。自分がある子供から「おばさん」と呼ばれ、えっ？もうこんな年だったのかとショックを感じた経験があり、日本の「さんづけ」のような呼び方があるといいなあと思っていながら、ややもすると、人のことを尊敬して「おじさん」「おばさん」と呼んでしまう女子学生がいた。逆に、日本で短期留学中お年寄り

の方のことも「さんづけ」で呼んでいて、恐縮だったという女子学生もいた。

二、「広場ダンス」に対する見方のことである。今の中国ではちょっとした空き地があると、中高年の女性たちが集まって、遠くまで響く音楽に合わせて踊ったりして、楽しんでいることは随所に見られる。それゆえ近所迷惑として問題ともなっている。この問題に対して、自分の母親もしていて、運動になるし、社交の場にもなるからよいとしながら、自分は年取ったらそんな迷惑行為をしないとの意見があった。それから広場ダンスのようなことは日本のお年寄りたちにはどのように見られるかと興味が示されたら、楽しいから羨ましがられるだろう、いや羨ましいどころか近所迷惑だと納得がいかないだろうと様々な意見が出された。

三、老後生活に対する考えのことである。中国では、年寄りが孫の面倒を見るのが普通で、自分もお祖母さんの手によって育てられ、ありがたいが、自分は年を取ったら、日本のお年寄りのように、趣味を楽しむか、生涯学習をするか、自由気儘な老後生活を送りたいとの希望表明があった。さらに、なぜ一般的には日本人は孫の面倒を見ないのか、なぜ中国人は子女の働いている海外まで行って孫の面倒を見るのかについて、言語表現上の違いから中国人と日本人の観念上の違いが取り上げられた。中国語には「早く孫を抱きたい」、日本語には「早く孫の顔を見たい」といった表現があるように、孫の面倒を見るか見ないかはすでに言葉に表れているのではないかとまで意見が出た。必ずしも正確な見解とは断言できないが、学生たちは今までに学んだ言語知識を駆使して思考していることは言えるであろう。

エピソードであるが、ちょうど試行授業の期間中、交流訪問に訪れる日本の大学生3名が授業見学のため、筆者が担当する「総合日本語」授業の教室に来た。日本の大学生から、授業を聴講するより、中国の大学生と何か教室活動をしたいという希望があったので、文化関連用語を使い、名詞あてゲームをして文化の相互理解をしようと決めた。名詞あてゲームは2人の学生がペアになり、一人が名詞の意味を説明して、もう一人がそれは何物なのか当てる。「七夕」「福沢諭吉」「屈原」「鯉のぼり」「子どもの日」など数々の中国の文化と日本の文化に関連する用語が混ざり合っただけで出た。面白いことに、「子どもの日」に対して、説明役の中国側の学生が「6月1日は何の日ですか」というヒントを出したから、当て役の中国側の学生が「子どもの日です」と当てた。その場で日本人学生が「子どもの日は5月5日ではありませんか」と異議を唱えた。そのため一時ゲームを中止して中日それぞれの「子どもの日」について情報交換した。このようにゲームをする過程で「3つのP」に触れられることもあるし、議論も行われた。現場でのパフォーマンスを見ていると、より正確に要領よく説明できるのはやはり試行授業を受講している学生のほうで、「子どもの日」をめぐる情報交換も受講生の一人が自ら進んで「3つのP」をもって中国の子どもの日についての情報を正しく伝え、好評を博したという印象だっ

た。

前述したように、授業では今と昔、自分と他人、中国と日本を比較しながら、客観的な事実を並べたり、その事実の背後にある考えを探ったり、それに対する自分の意見を述べたりしていたのである。

もちろん、実施方法はこの二通りの流れとは限られず、トピックの性質、学習者のレベル、場面などに応じた方法であればよいものである。

5. 試行成果と今後の課題

試行授業を通して、どのような成果を得たか、シラバスに規定された目標を達成したであろうか。振り返りをして次のようにまとめてみる。

- 一、日本語で自文化を学ぶことであるが、配布資料が日本語となっており、中国の話は日本語でどのように語られているか必要な情報を得ること、そしてディスカッションが日本語で行われる過程で情報内容が確認され、日本語による表現が強化されることで、日本語の勉強にも文化の勉強にもなることは確かである。
- 二、「3つのP」を発見することで文化の理解を深めることであるが、確かに「3つのP」を手がかりにして文化を多角度より見つめようという方法を学ぶことができ、発見する過程もかなり面白く、「3つのP」の枠に入る中身が増えるたびに達成感を味わったような喜びを見せていた。しかしそれは「端午節」のような、はっきりとした「practices」と「products」があり、「perspectives」に関して定説があり「3つのP」が発見されやすいトピックの場合に限ってである。「敬老」のような抽象的なトピックの場合、「3つのP」が明らかでない上に、「perspectives」についても定説がなく、配布資料だけでは情報不足で、ディスカッションにおける意見のぶつかりや日ごろより積み重ねた知見により発見することが要求されるため、議論が中国語になることが多い。これでは日本語による口頭表現力の養成という目的からずれることになる。そのため、議論はなるべく自分の日本語レベルに相応した範囲で行い、話が引っかかって続かない場合はストラテジーを使い、柔軟に対応するように指導することは今後の課題となる。
- 三、自文化を伝え、説明する能力の養成ができたかという点、一概には言えないが、毎回の授業で取り上げられるトピックなら、だいたいできたと言えよう。要領よく自文化に関する情報を伝達し、意見を交換するための口頭表現力がそれだけ磨かれたことも確かである。しかし、配布資料に書いてあるまま固い表現を使うことが多い。そのため、配布資料に掲載された情報を自分の話に変えた上で伝えるように指導することは今後の課題である。
- 四、自文化への再認識という目的に関しては、シラバスに規定されている個々のトピックに

対していえば、達成したといえよう。しかし、中国文化全体への再認識といえば、一朝一夕に達成するものではなく、長い過程が必要なのである。その一方、試行授業を受けた学生から「中国文化は日本でどのように受け止められているか」「中国文化が日本に伝わった後でどんな変容が起きたか」などに対して興味を持ち、卒業論文のテーマにでもしたい、「お正月になぜ爆竹を鳴らすか」「ギョウザはなぜ餃子なのか」「お墓参りになぜ偽のお札を焼くか」という意味の質問を自分の家族や友達にも出したりする癖がついたようだ、「漢字という記号にどんな人生観、社会観、美意識が凝縮されているか」と改めて漢字の学習を始めたといった報告があったことから、学生たちがさまざまな機会を利用して自国の文化を改めて認識するようになってきたということは言えるであろう。言い換えれば、この授業は自文化を再認識することにつながるよいスタートとなるとも言えよう。このスタートを持続可能な学習につなげていき、そして持続的に学習することでまた認識が新たにされるという好循環を形成させることは今後の課題である。

五、シラバスと実践の間にずれがあり、思ったように実践ができなかったこともある。例えば変更前のトピック6の「お墓参り」に関して、その作法と背後にある価値観である「祖先崇拜」という中国の伝統思想について議論を通して理解してもらいたかったが、それはあまりにも大きなテーマなので、結局触れずに置いた。今後実践しながらシラバスを改訂することがあるかもしれないが、どのように学習者の言語能力に適したテーマを選ぶかは今後の課題である。

[注]

- ^①国際交流基金日本語国際センターで実施されていた海外日本語教師向けの研修である。日本語教育の実践において実現したい日本語教材制作、教授法、カリキュラムの開発等の課題や解決したい問題点を具体的に有するものを対象に行う研修で、自律的な問題解決能力の育成を目的とする。参加者は自身の教授環境にある課題の中から、自身でプロジェクトテーマを決定して研修期間に取り組む。
- ^②2018年1月に中国の教育部によって公布された『高等学校英語教育スタンダード』に提案されている方針であるが、大学においても提唱されている。

[参考文献]

- 国際交流基金 (2002) 『21世紀の外国語学習スタンダード』 National Standards in Foreign Language Education Project (1999) *Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century* 日本語版 聖田京子 (訳)、国際交流基金日本語国際センター
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-1usa.pdf>
(2019年9月3日)
- 築島史恵 (2010) 「日本事情や日本文化の教え方 ―日本語の授業の中で―」、『日本語教育通信』第66号、国際交流基金 <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/archive/iroha/201007.html>>
(2019年9月3日)